



金松堂梓

下



第三編 榮 月夕 冬楓 卅三年の 仇嵐 井間堀の 韓紅

中

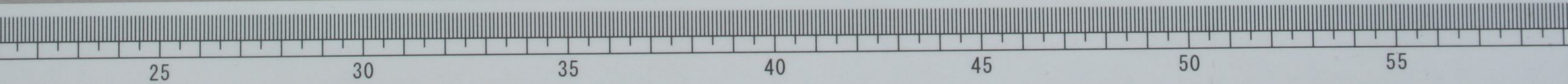


雜賀柳香著

假名垣魯文閱

尾田彫長

上





假名垣魯文閱
雜賀柳香著

元田影長

上

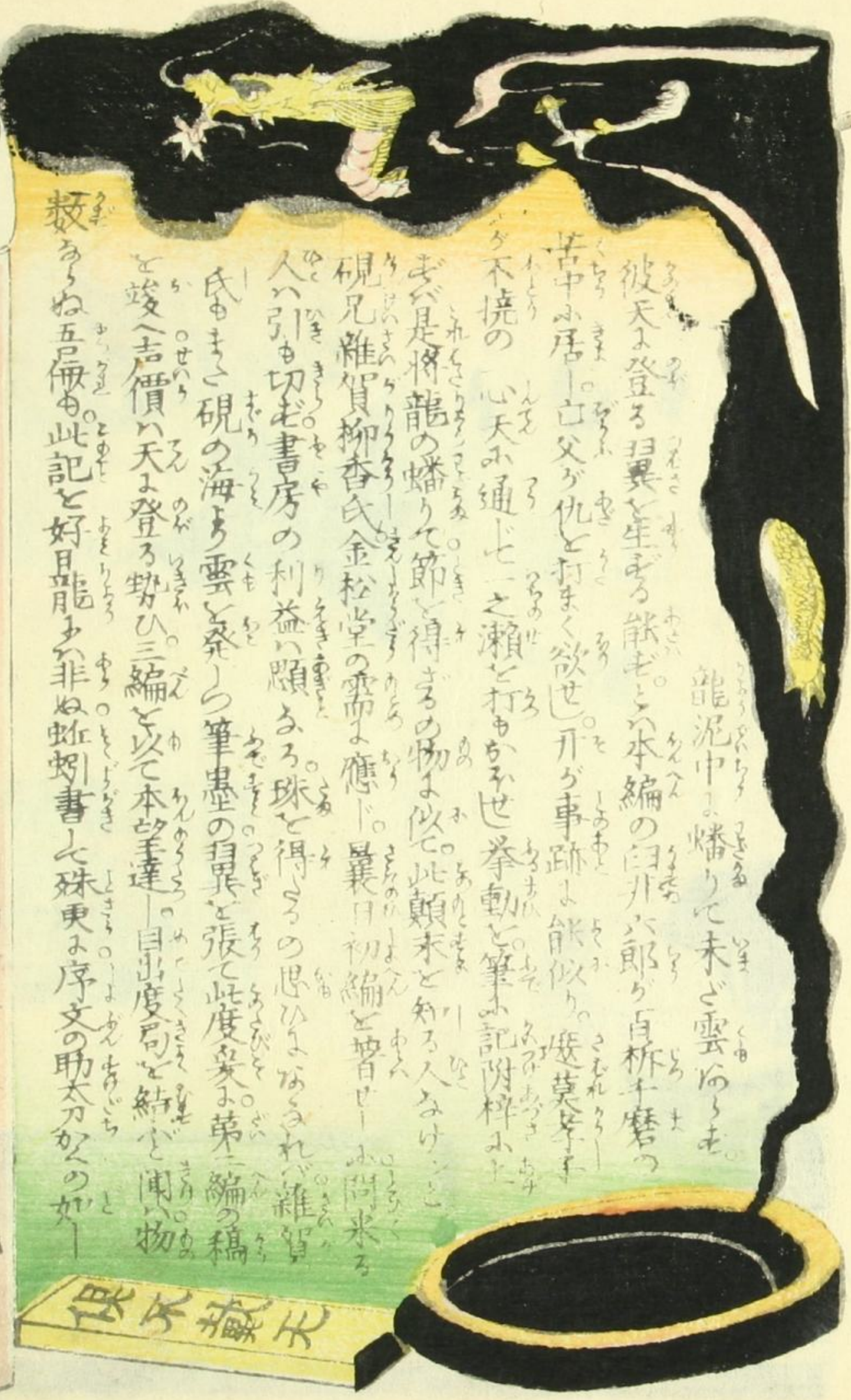
35

30

25

20

4822
7



龍泥中。燐りて未ど雲向る也。
 彼天よ登る月異を生る能と。本編の白井六郎が百折千磨の
 苦中居。口父が仇と打まく欲せ。升が事跡は能似り。選莫草子
 不挽の。心天に通じ。之瀬と打まかせ。挙動と筆記附梓小
 是將龍の燐りて節と得るの物よ似。此頼末と知る人なげし。
 硯兄雜賀柳杏氏金松堂の垂る。應。曩日初編と替。小問米
 人の引も切。書房の利益願。珠と得るの思ひ。なれば雜賀
 氏も。硯の海より雲と祭。の筆墨の異と張。此度爰。第二編の稿
 と。竣へ吉價。天よ登る勢。三編と以て本。目。度。結。團。物
 教。ぬ。吾。備。也。此。記。と。好。且。能。去。非。ぬ。蛭。蚓。書。之。殊。更。よ。序。文。の。助。太。刀。切。の。如。

明治十四年三月上流

橋塘伊東專二記

冬風三上

此は癡作

<48-8324>



冬楓月夕榮三編卷の上

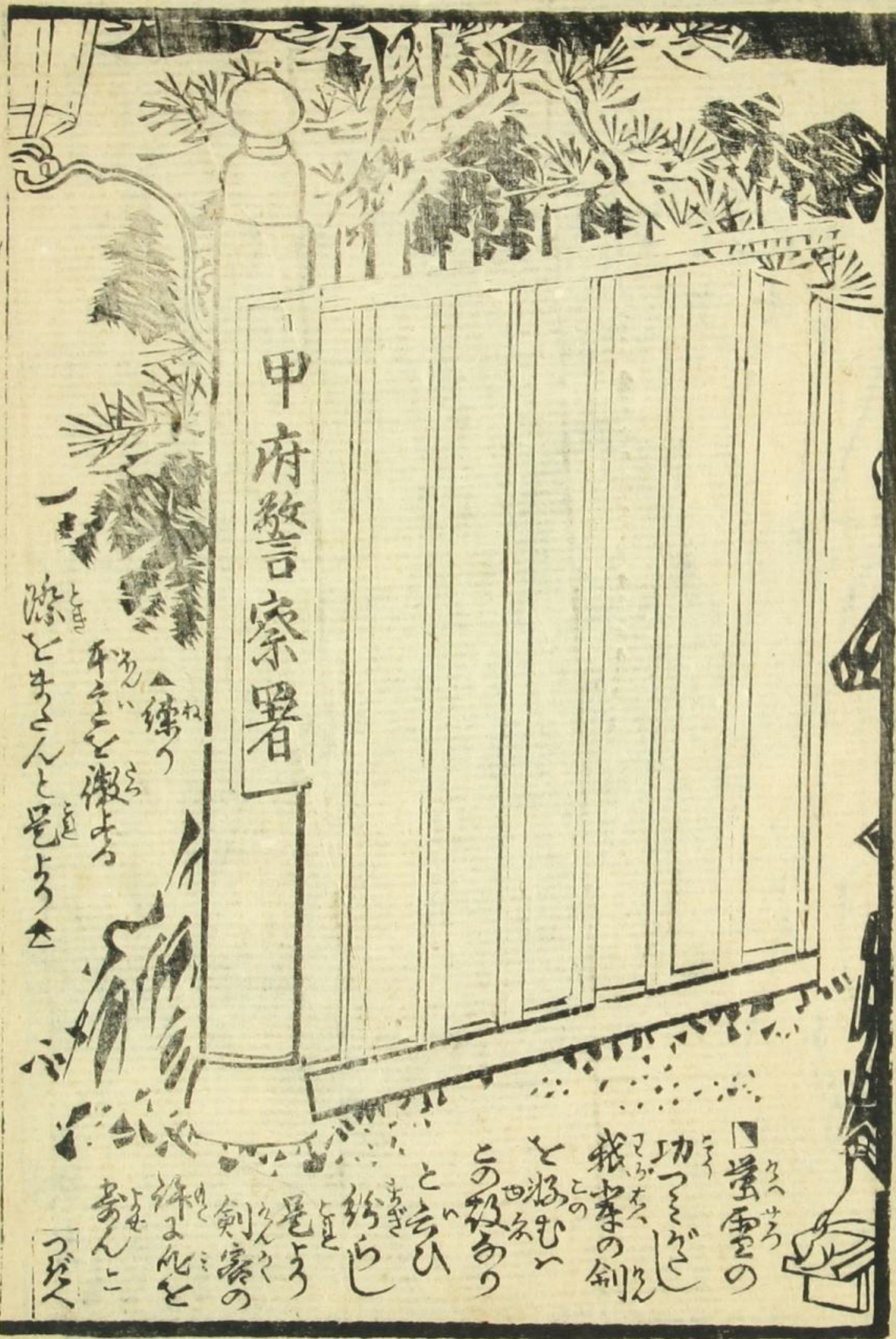
猫々道人 閱

雜賀柳香 著

野史氏曰。報讎者。臣子の分。勢不得。然而。然者。不可。以。繩墨。澤之也。今。吏。有人。殺其君。吾。坐。視。曰。國家。有。禁。吾。弗。可。不。得。犯。也。人。未。嘗。不。疾。其。罪。也。今。吏。有人。殺其父。吾。命。而。弗。顧。曰。法。度。最。矣。吾。弗。可。得。違。也。人。未。嘗。不。疾。其。罪。也。故。為。臣。子。者。不。幸。遇。人。倫。之。變。寧。犯。嚴。禁。坐。重。刑。獲。為。忠。臣。孝。子。庶。幾。有。免。其。責。者。歟。故。曰。報。讎。者。臣。子。之。分。勢。不。得。然。而。然。者。不可。以。繩。墨。澤。也。されば。向。井。吉。希。の。忠。僕。源。次。



六郎 向井遊公羽



冬振三上

明治十四年第四月発行
從是熊ヶ谷縣廳江 二十四丁



ふき 甲しとぬじが
現今去生と格育と
文武は長きと
安及ぶ山屋法を命君
とそまゆ我れの人と愛い
君よれんで武術と練
之と或人へ紙文と程
月君の郵便とあり
山屋君は雨宿と
ぬ乃熱心のをもと

大森寺
伊ヤ
暴を
人々の
と者
大長谷か
と保



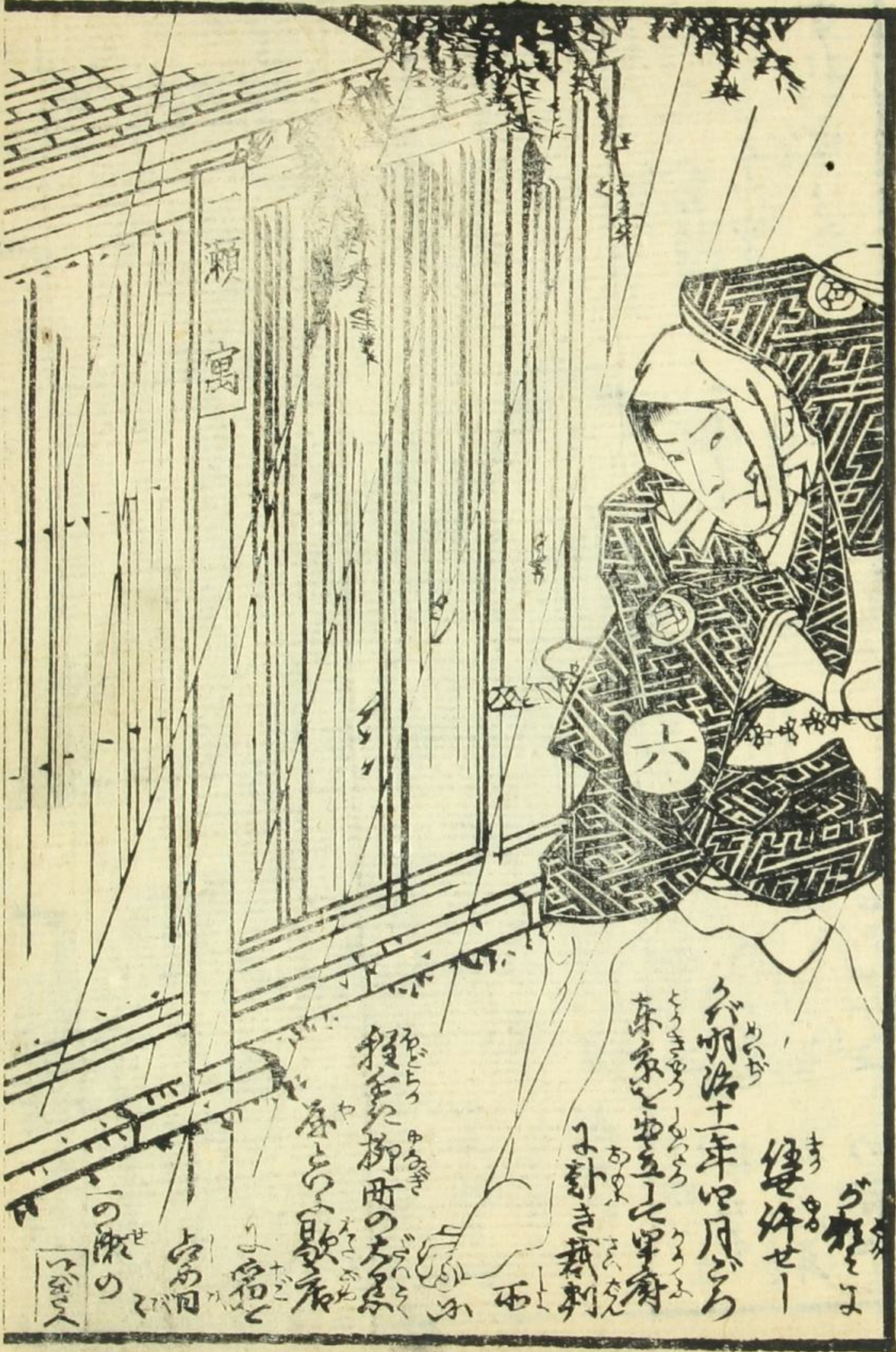
ふき 甲しとぬじが
現今去生と格育と
文武は長きと
安及ぶ山屋法を命君
とそまゆ我れの人と愛い
君よれんで武術と練
之と或人へ紙文と程
月君の郵便とあり
山屋君は雨宿と
ぬ乃熱心のをもと

はらぎるちと飛せられ
一か帯が腹中一物
つと鼻せうと
ら丹の我とが
知んきあう
老干時
明治十年の
水変へ名を
を裁判より種要
裁判より
支種活と
甲毎



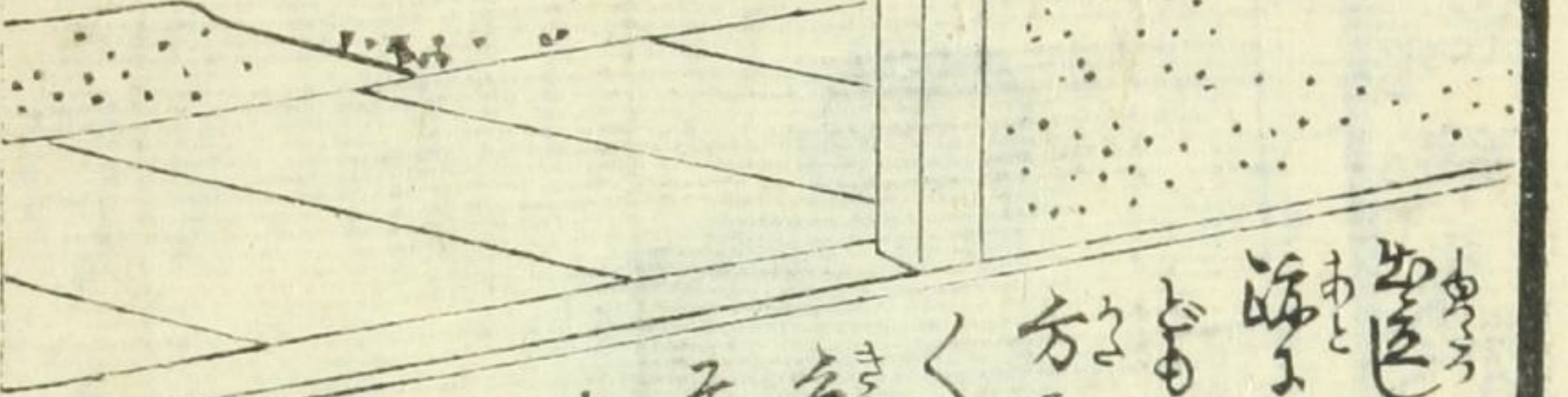
あつたると
 関せり
 先んぎ
 其ん人
 制も
 とが
 俗也
 あ
 のや
 甲府
 極
 極

くらち負て拘らとちく
 且一由文内於換どは
 ぐじと不使もあなよ
 医際よ
 珍桑き
 山岡君
 子服と
 幸子湯治
 子靴た甚
 生きと
 浪ての
 ひ山屋
 君由女帝



六
 六明治十年四月から
 東京と申す一甲府
 子靴た甚
 子靴た甚
 子靴た甚

一月を多り情た
 舟目を送りか
 五原り方野
 昔あねバ
 突早宿
 みの進局
 さきき遠蔵
 なか下先ぬ
 系一後へ系
 子父と重バ何舟
 う出系来るす
 ちらんそのたを
 清ん本名と

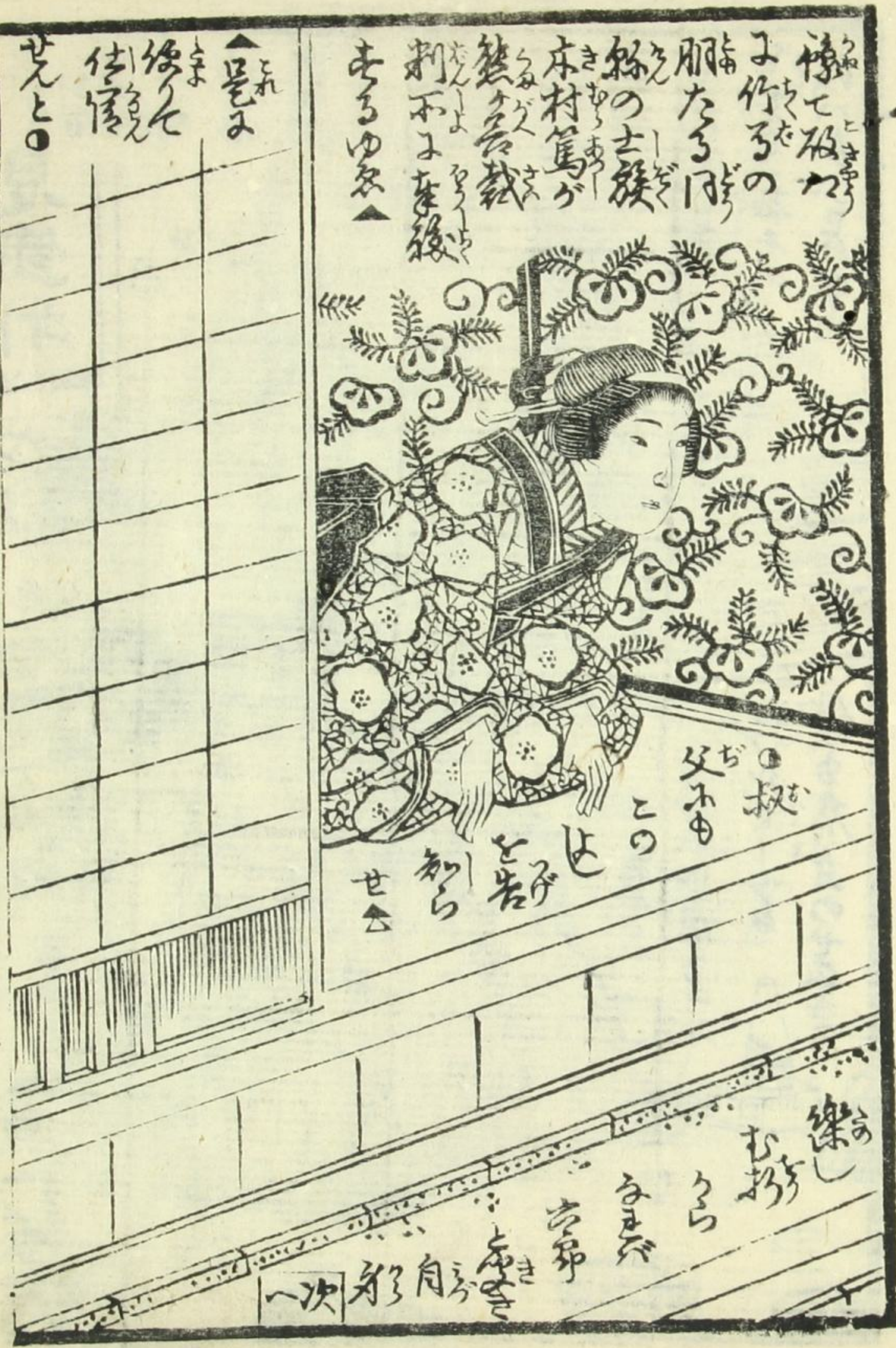


一月を多り情た
 舟目を送りか
 五原り方野
 昔あねバ
 突早宿
 みの進局
 さきき遠蔵
 なか下先ぬ
 系一後へ系
 子父と重バ何舟
 う出系来るす
 ちらんそのたを
 清ん本名と

いひや
 奉勢を
 うらひおもち
 へと思へとも
 りまき機舎の
 来らぬや途を
 色と糸遠りの
 際まく裏重板
 ねんと人ちりて
 切今とも出来
 ざれば室しく糸



いひや
 奉勢を
 うらひおもち
 へと思へとも
 りまき機舎の
 来らぬや途を
 色と糸遠りの
 際まく裏重板
 ねんと人ちりて
 切今とも出来
 ざれば室しく糸



▲是れ
 母の
 仕度
 せんと

懐て取つた
 子竹子の
 服たるは
 糸の士族
 本村篤が
 裁きたる
 刺不よを
 後

父の叔
 の
 世を
 知ら

楽し
 自ら
 次



六
 幸さた
 父が
 小水知

つき 官途よつと
 去のた而して
 ろを易く
 是さんと

六
 日年の十月
 世を

六
 判不
 退出
 日七

冬
 三

七

見喪非



是れも
 六弟
 大弟
 へとうち
 後ハさびしいもた

僕も身身のせまき
 換死せよ
 父直理八回篇
 多くもほど
 初初の大



叔父の月十君の由り
 あるうきて高知への
 歩張と同一よき常

女
 六
 父が後徐同好人

推案と
 と一ツ

るき 叔父
月下と由
懐後一七
君を兄と名
を理ある
おれを月
給後勢よ
好と色
を粉ほえ
るさるまば
この身とる
結構と登
の雨あ



お強き孝子
の心あるや知れぬや
あまくと由

さし
お強き孝子
の心あるや知れぬや
あまくと由

官 許
牛肉丸
大包代二十五丸
小包代十二丸五厘
小包代七丸五厘

官 許
天泰丸
大包代二十五丸
小包代十二丸五厘
小包代七丸五厘

此丸は男女老幼皆宜なるものなり
分一の丸と云ふものあり
考へて此丸は用ひ易し
まをりやみく
されば虚弱の人と云ふ病は健
お強き孝子
の心あるや知れぬや
あまくと由

文 錦繪
地本 問屋 金松堂 辻岡文助
日本橋區横山町三丁目二番地



第三編

榮

月夕

冬楓

韓紅

仇山嵐

十三年の



35

30

25

20

A522
8

よめ
あもみぢり

の海

あふん

月の

中の

柳の

夕をえ

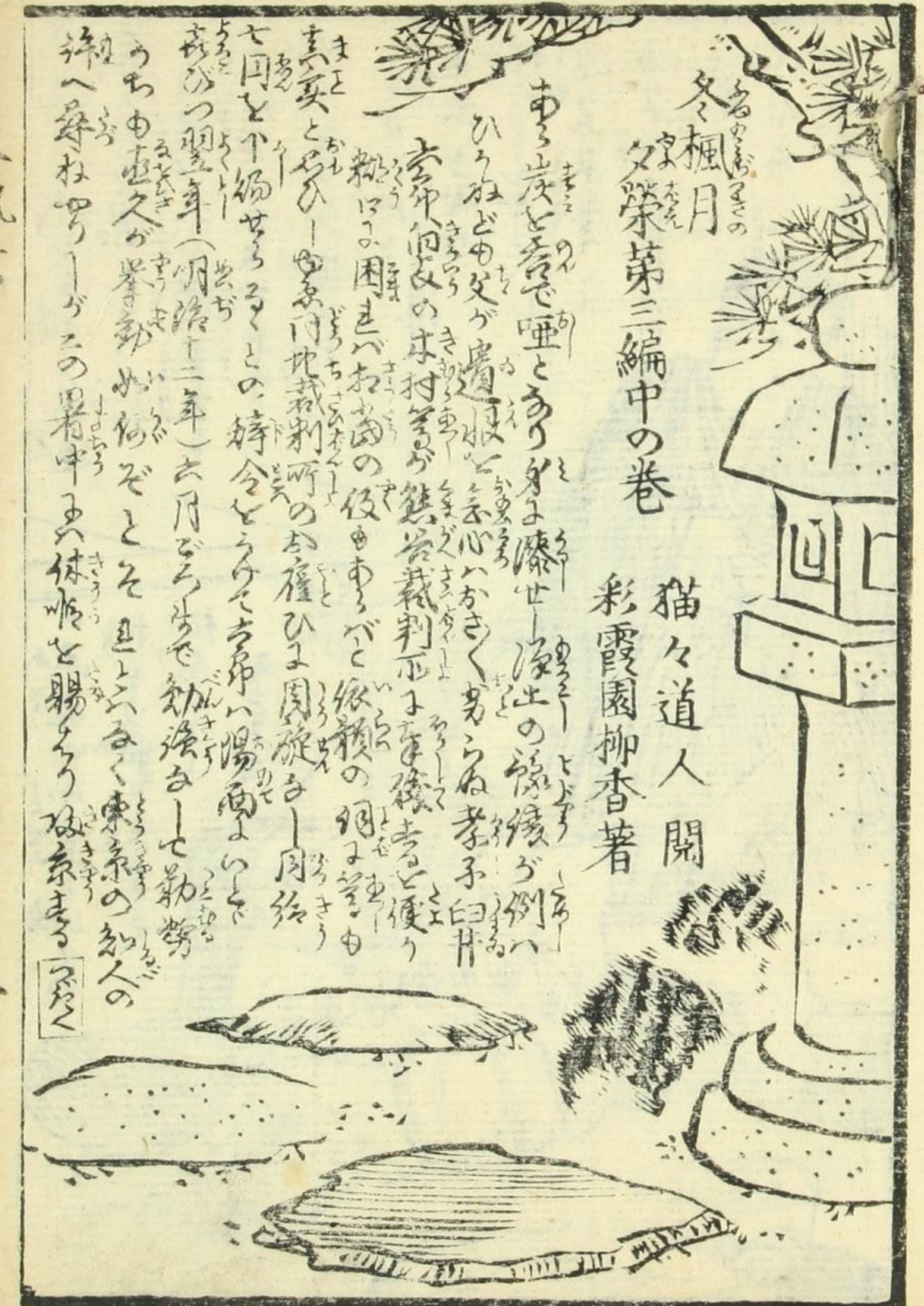
きんねをなん



冬楓月

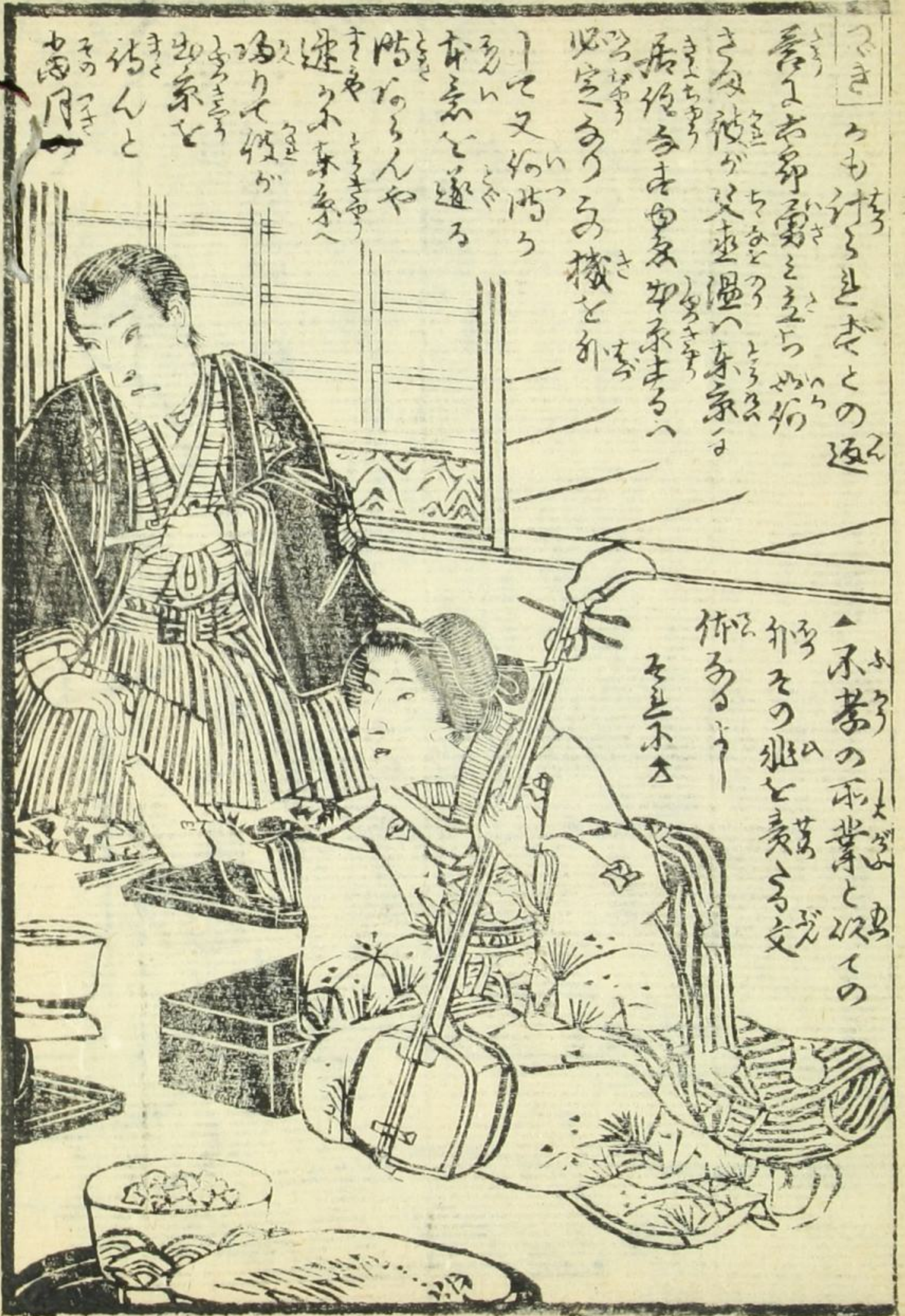
夕榮第三編中の巻

猫々道人関
彩霞園柳香著



あまの山と香を唾とあり身は際せし海止の縁縁が例ハ
ひうねどの父が遺言に心をかきつる孝子白井
孝平の父の遺言が然る裁判の事後考と便り
親は困るおのの役もあつた依頼の御子等由
まゝとあひし御門地裁判所のお産ひは周旋さし月給
七回と下編せらるるとの持合とらけさ希い湯面よ
あつたつ翌年(明治十二年)六月にららで知法なして勅勞
うち由直之が譽勅が何ぞとそ且よふまゝ東系の人
神へ尋ねたりがこの異者中其休暇と賜るる故系まる

248-8325



つまらぬ汁とよきとよとの返
 善いお節のいとよきとよとの返
 さな彼が父とよきとよとの返
 居候るまよきとよとの返
 必定ありの機とよとの返
 して又何のう
 本意とよとの返
 附らんとや
 速くよとの返
 取りて候か
 物系とよとの返
 物んと
 高月

不苦の雨業とよとの返
 介その此とよとの返
 作あるとよとの返
 毛とよとの返



本村村長とよとの返
 又よとの返
 客年米袋とよとの返
 浴衣とよとの返
 家で不者のぬい
 身殺せとよとの返
 物者とよとの返
 芝目とよとの返
 せとよとの返
 服とよとの返
 の箱とよとの返
 出候の後とよとの返
 方へとよとの返

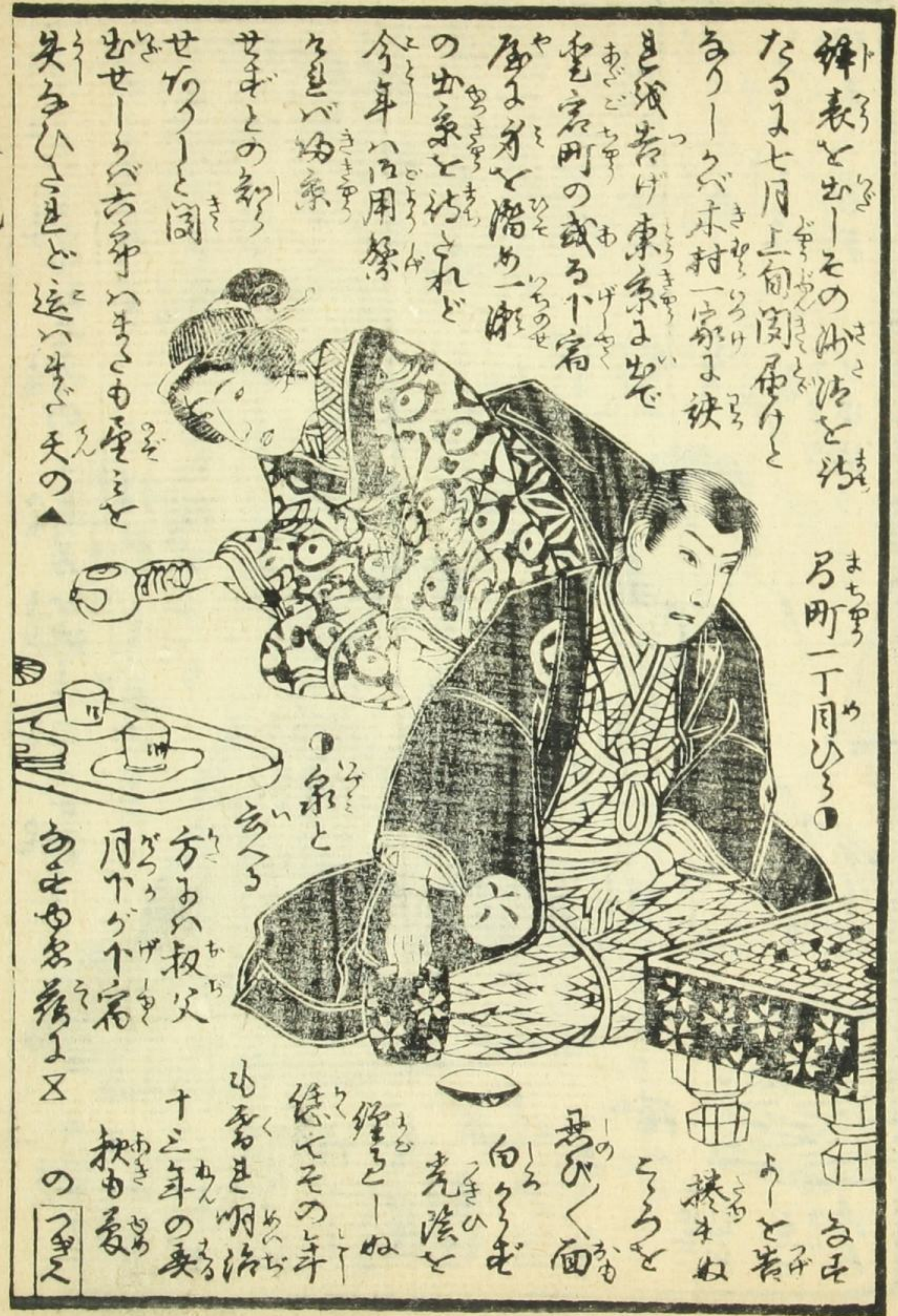
直
 長
 下とよとの返
 又とよとの返
 まとよとの返



つま
お世
ふる
へー其
の今
のめく
あか
かか
陸へると羽目速やくふ

我へいふ
ぬ様も
めい
そめ
云莊
こい
せーが
海年の八月南依之

長
と知
と知



舞表とわいその海法と
たるよ七月上旬間届け
ありーぶ木村一家は
は成若げ東系は
宅名町の成る下宿
屋よ方と潜め一
の糸とたされど
今年には用祭
なまは糸
せまとの糸
せのうーと
かせーくお弟はまも屋
失ふひとと運いそ天の

乃町一丁目ひ
糸と
方あ叔父
月下が下宿
あまお弟よ

君のく面
白く
光陰と
係てその年
由香は明治
十二年の妻
秋由
のつ

つきま くるるとるあてて冬の
初めとあつたるが
或日途中中を要
助ぐ換かあが
（前編よありよ
お舎一階がら
安らざるやと尋
ねにおあげはされ
たのるる日
早門のか郵受
関とあ一階と
いふ人へ今度
甲冑の裁判



△茶の
少のあ
と高日
い室一々
帰り
翌日馬
表町
のええ
ありあ
落や
おん
おん
おん
おん

石橋と解直
東条と書
裁判と足指
伊よあつとあ
報わがわつ
風後由來聖人
おあらせ中
なれどお名
お知はぬ
おあつとあ
おんおあつとあ
おんおあつとあ
おんおあつとあ



年月
の
おん
おん
おん
おん





つき
まき
と十
ろ
ぼ

と一月の四五
黒田長徳君の
内よ強兵を
家持務居不
とそ知しなれを
務居く不問
一際が拳動を
因しふ遠を
岡基のち敵
何公のまとの
るまは度
ありしは
を理あり



▲直久の
上名裁判
甲府より
せし六十三
八月
つぎ



つき 高橋齋藤屋
 家子家半の終結
 ありし由原拾得の
 為象ありと後半
 件と要囑さす
 月二十日
 邸宅よ

▲家持
 家持等と
 家持の後

又一々種々小服業
 みるも今の意
 々々ハ熱海の
 温泉小浴せん
 とその相成ゆ
 ありし由原
 年上月十七日の
 年節日

○其
 種名
 不告



○君の用
 其の相敵ありと
 一七月
 活間一が直之入
 近所危角は傷れど

二十日
 路の郎
 月

▲其
 或と
 成つて長
 種

○其
 種名
 不告

此処六郎がとみ逢
て直久の勤王と聞
知なれば浴室の前に入る
べき画を見給ふべし

移居する
はさるは用也



つぎ来る
この中
家持精
氏が女宅
よ海へて連
久も同宅へ

△何んぞか
偽連へる
もやんや
もやんや
もやんや
もやんや

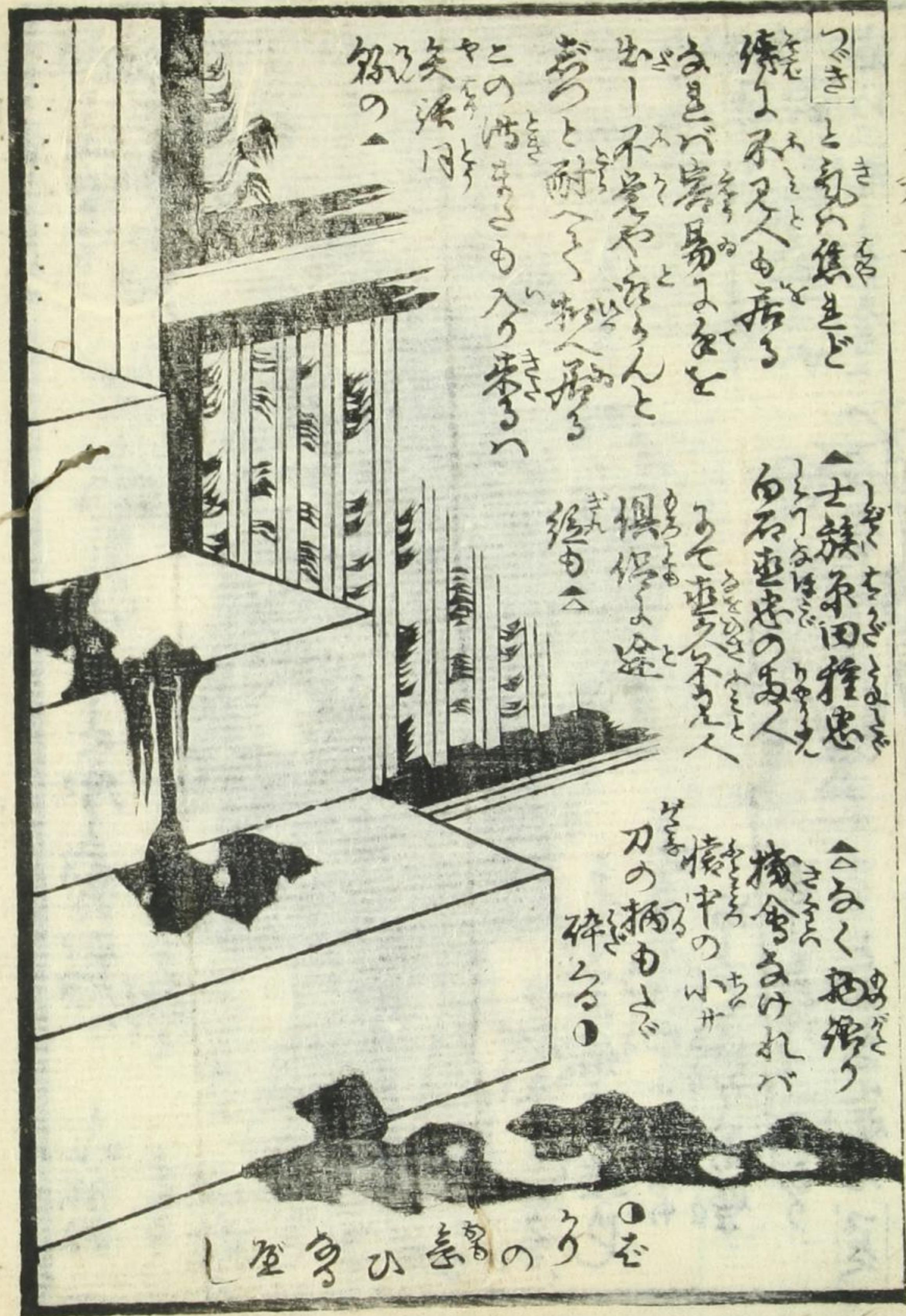
△不え人子
此先生かか
健ひゆり来る人
不え人の身小枝扱
△おれと連久
△おれと連久
△おれと連久

△おれと連久
△おれと連久

来りしお常の
高田の藤久名
人か宅へ
来るてん
是べ之個へ
不立を茶お
内敷へてつら
なくぬ宅あま
うら内開があ
潜あをたつ
下さくと何
希ハ二階よ



△おれと連久
△おれと連久



つぎと氣の焦きど
 傷ふ不又人も病る
 又はの容易よまを
 出さ不覺や病ふんと
 病と耐へる病ふる
 この病ふるも入り来る
 久遠は
 病の

士族系田種忠
 白石連忠のあ人
 して重なる人
 俱備の途
 終る

二なく抱持
 懐中の小冊
 刀の柄も
 碎る

し至多の急のうを

官 朝鮮
 許 名法
 牛肉丸
 大包代二十五製
 小包代十二製五厘

官 天泰丸
 許 名法
 大包代二十五製
 小包代十二製五厘

此天泰丸は長い昔一たんせられた。せん
 まく。らうもあつ。まやく。せん
 せんどのせだ。小児百回がたその代
 一切のせだ。用ひて功獲達うあり
 真しくいふ根拠あり

文 錦繪 問屋 金松堂 辻岡文助
 書牌 地本
 日本橋區横山町三丁目二番地





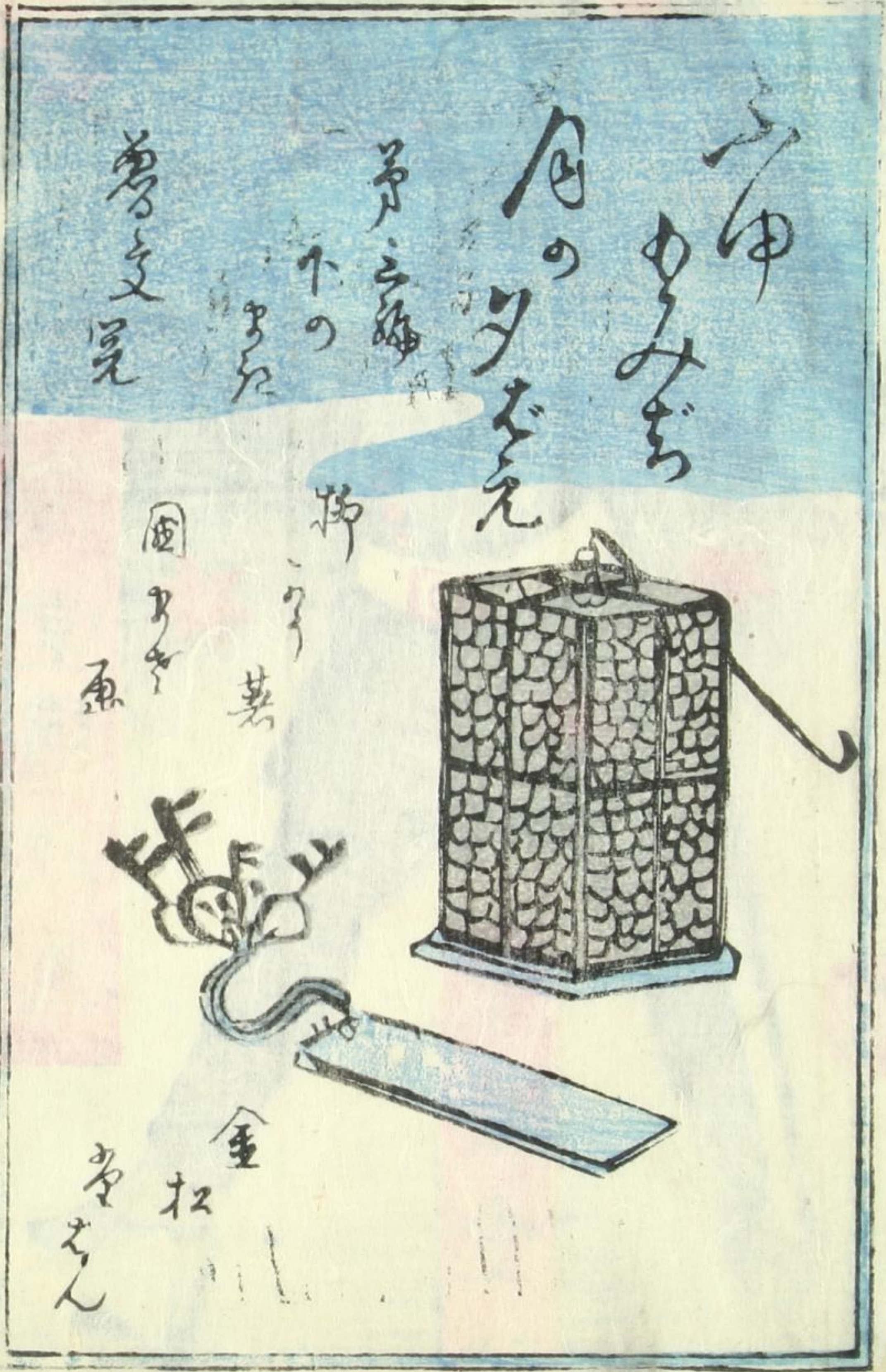
20

25

30

35

1522
9上



月
の
ツ
を
え
下
の
魚
著
金
松
冬
さん

魚
著

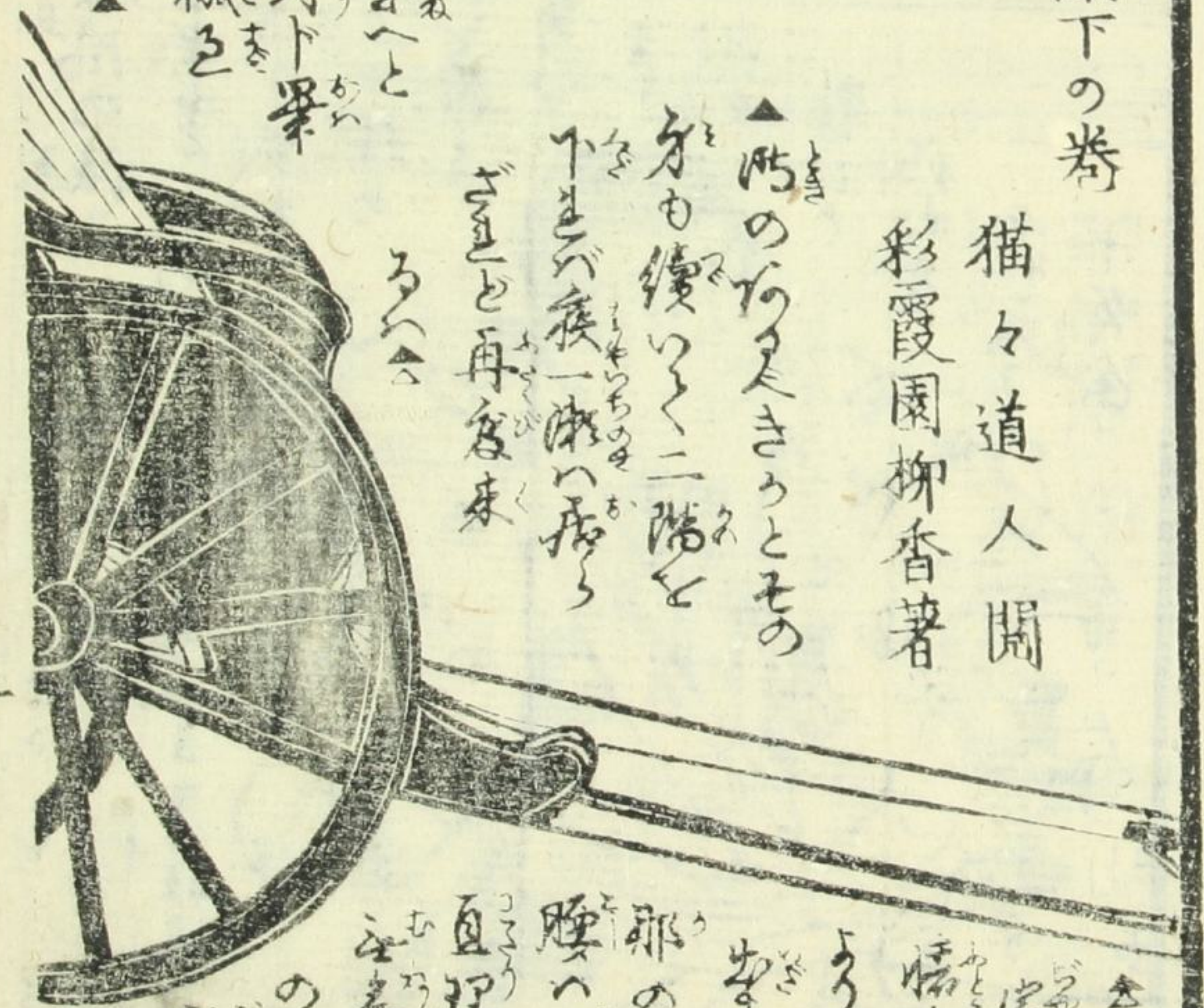
金
松
冬
さん

冬楓月夕榮第三編下の巻

借況央よ垂久ハ身と
起して不覺人よ對ひ
杉本伴へ云遣る是き
用事の何ぞ致失基
其り料紙半切と貸まへと
何らさうく書然め封ト果
里そ二階と下りるこの機色
して又何所の輕つべき

猫々道人閑
彩霞園柳香著

△所の何ぞ是きうとそ
身も續つて二階と
下るに夜一階の病
さよと再度来
るへ



那の下
腰へ父
直理ガ
の瓦
船を
次へ

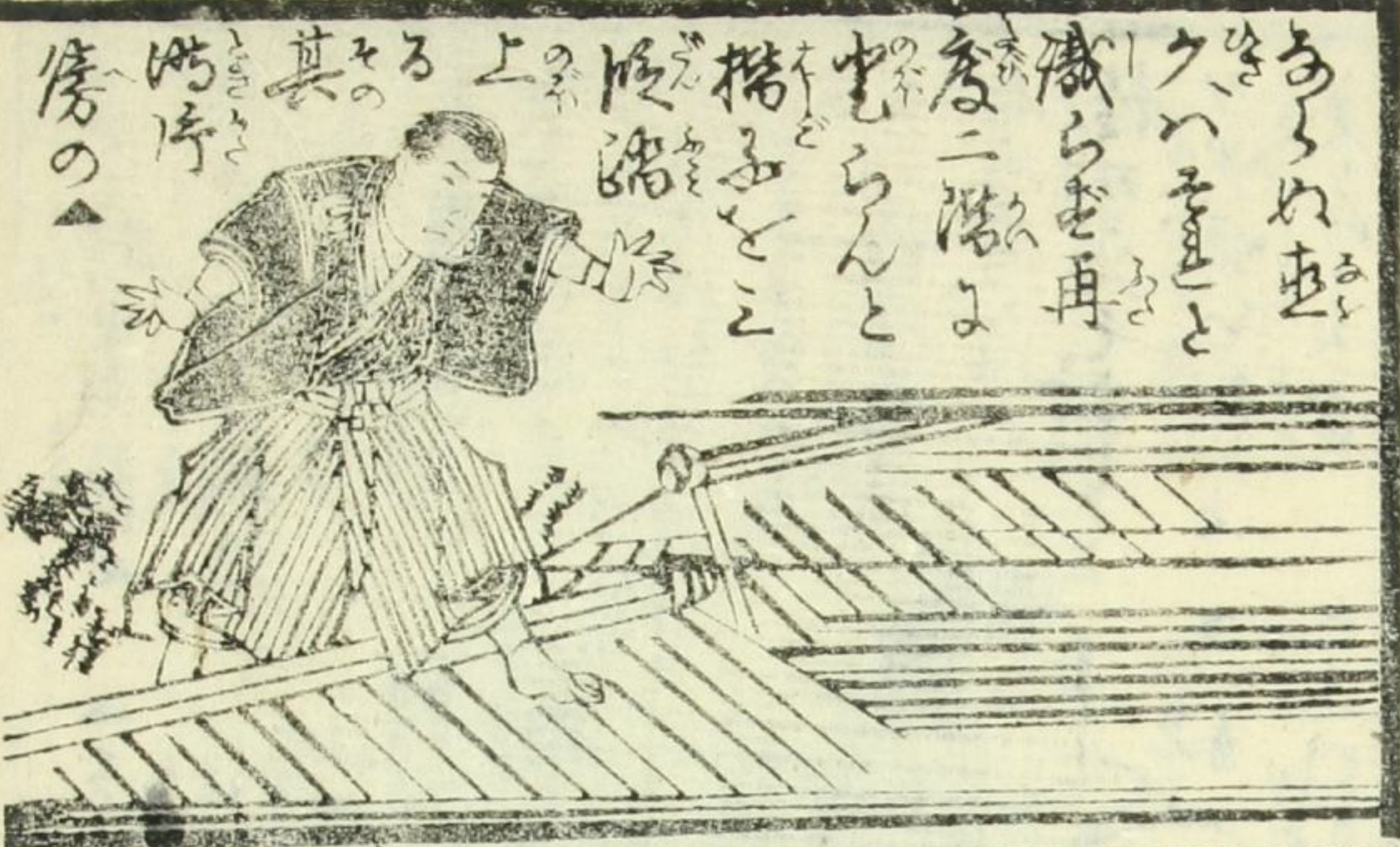
<48-8326>

つき 逆たるを
雨霧なき
あまきば
こきやく
軽ハ
其由少
ハ移び玉
えと技き
あをたつ
羽織の中
よ履きて
侍とも



▲展風の法よ
糸とあせ侍つ
お命とりとま
あつマ
オレ
あつマ
暫らく
侍ね星
霜後
十有餘

▲慰めやさん考ふ
の一表昇桂未練



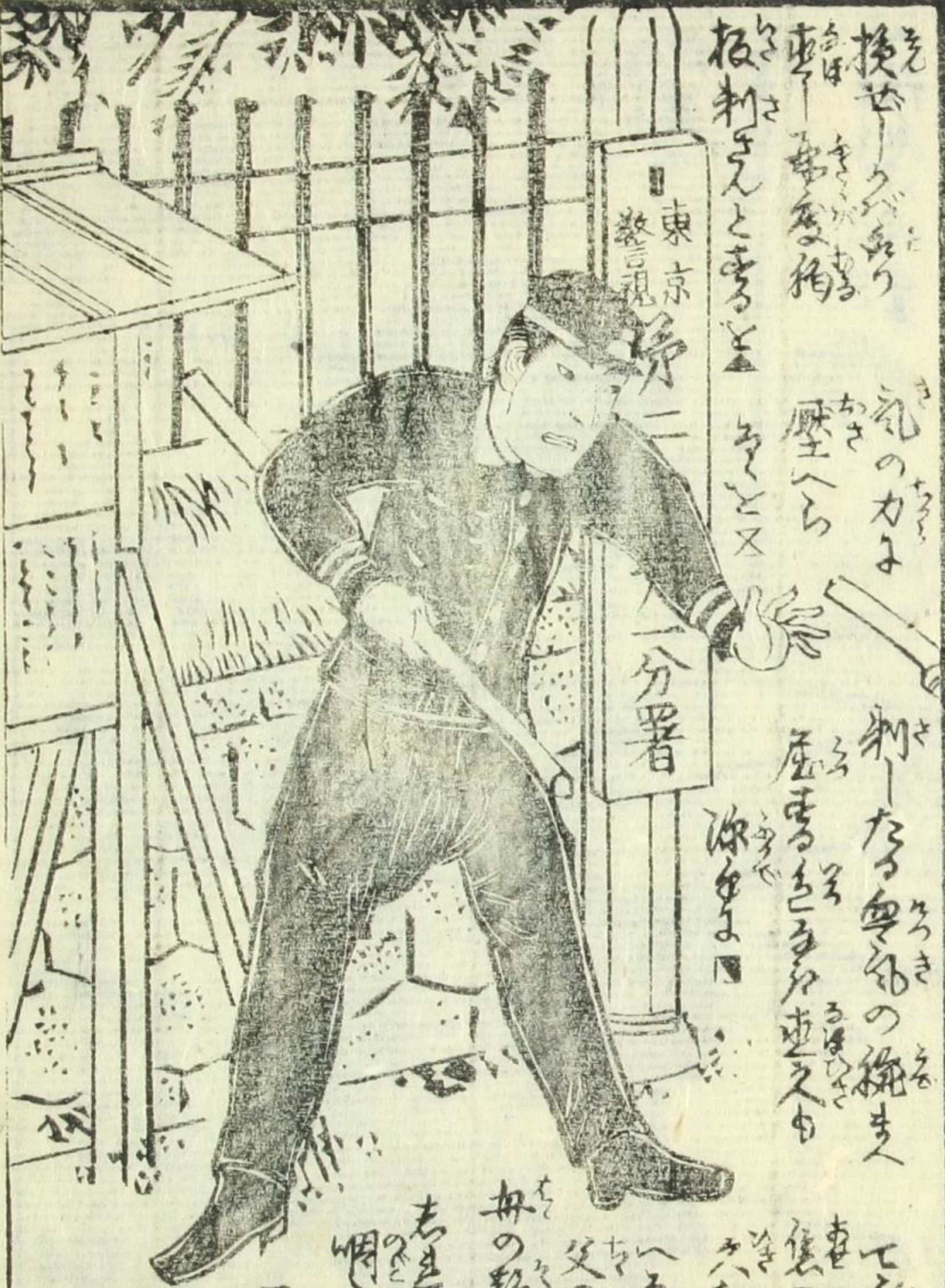
あつぬ
クハ
織ら
冬二
せら
掃ふ
上
其
侍
傍の

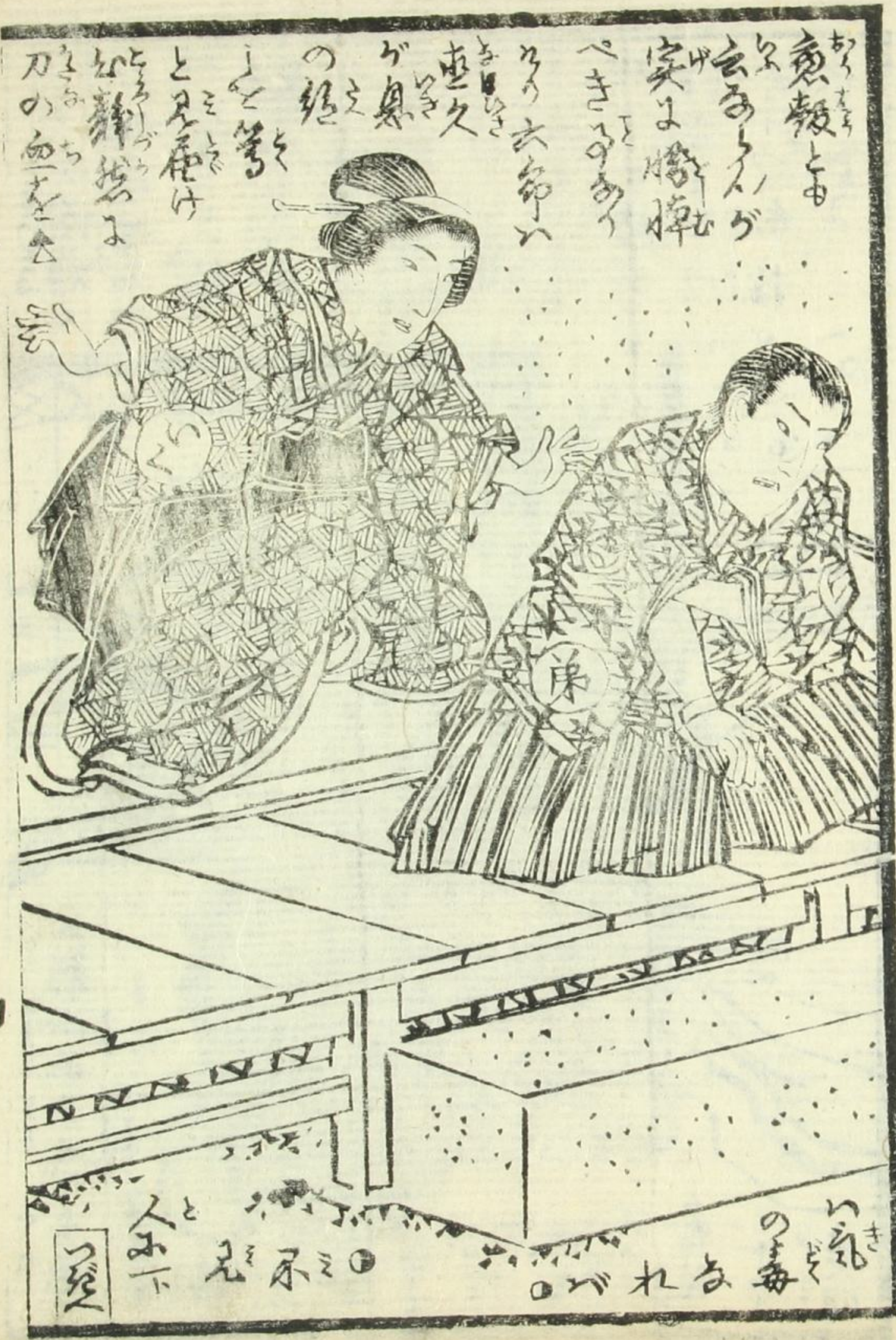
▲世態八月日
愛重どの後らね
はう腹中よ
わらあん某
其性海が疎
奉よ教
初と
白丹直
六名十有餘年
のそら
若由その方
亡女が
○意
び
勝負結せ
奥たるよ
あつマの思
つけ
あつマ
ら
松ひ
おの

時世成るを
 敵らちと小機を
 一云この方ゆたが
 女も罷り遊之
 ありきと半を
 以て六舟が横を
 らんとするゆ
 今一疾勝負
 及ぶぬらんと
 鏡乃りて遊之
 が明候と判んと
 突うけしと突
 一親
 ひとハ別
 激也
 中石とも
 小機とるとは
 一云この方ゆたが
 女も罷り遊之
 ありきと半を
 以て六舟が横を
 らんとするゆ
 今一疾勝負
 及ぶぬらんと
 鏡乃りて遊之
 が明候と判んと
 突うけしと突
 一親
 ひとハ別
 激也
 中石とも
 小機とるとは



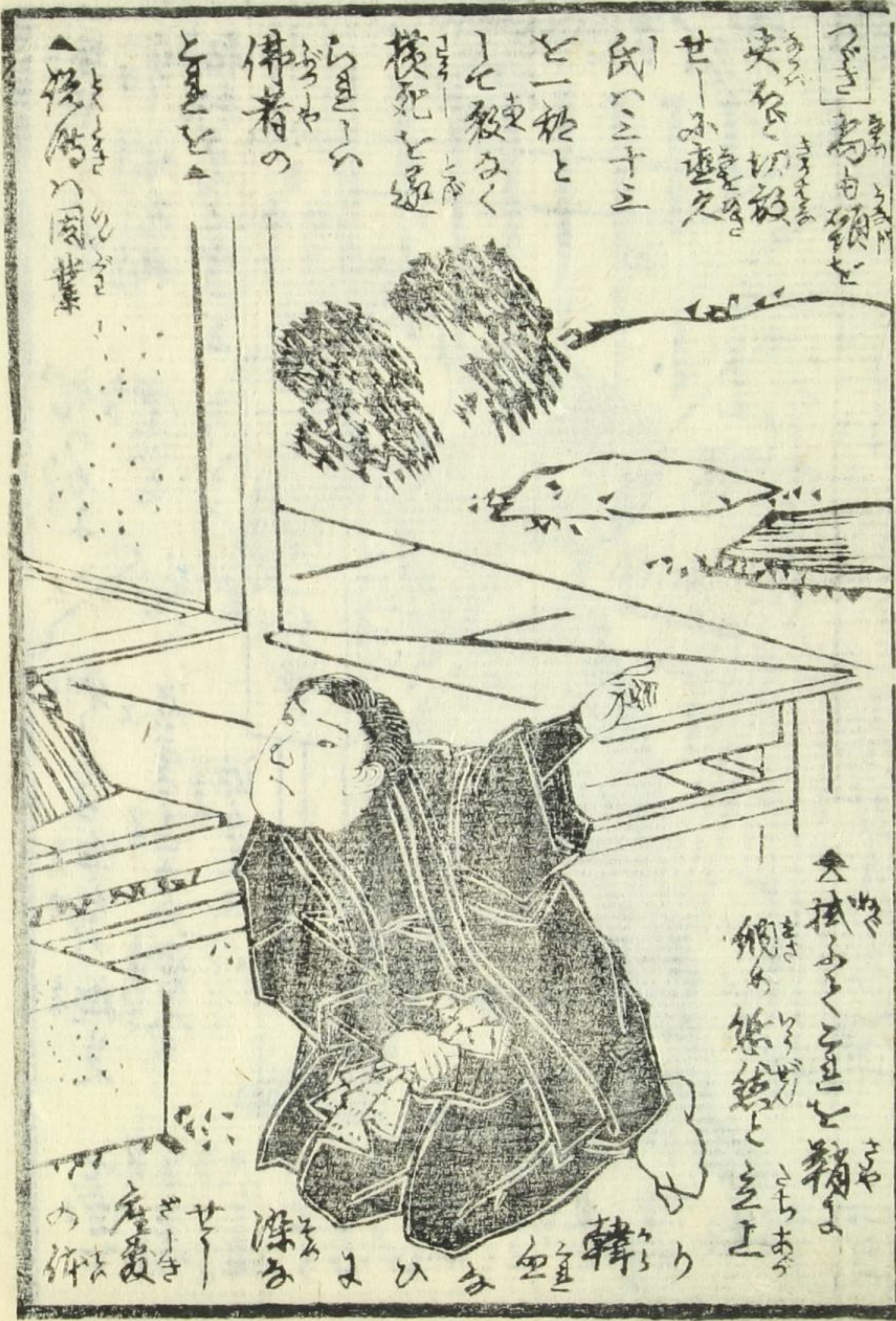
東京 二
 一分署
 換成
 板刺
 忍の力
 物たる身
 源也
 七身と
 候る遊
 六と端
 へるが
 父の仇
 母の敵
 志まよと
 明元と
 二文刀
 刺
 夏





愈敷とも
 云あらんが
 突よ橋牌
 べきみあ
 乃の面を
 とを居け
 の結
 が息
 壺久
 一と等
 公静然よ
 刀の面を

人ふ下
 不
 毒
 毒
 毒

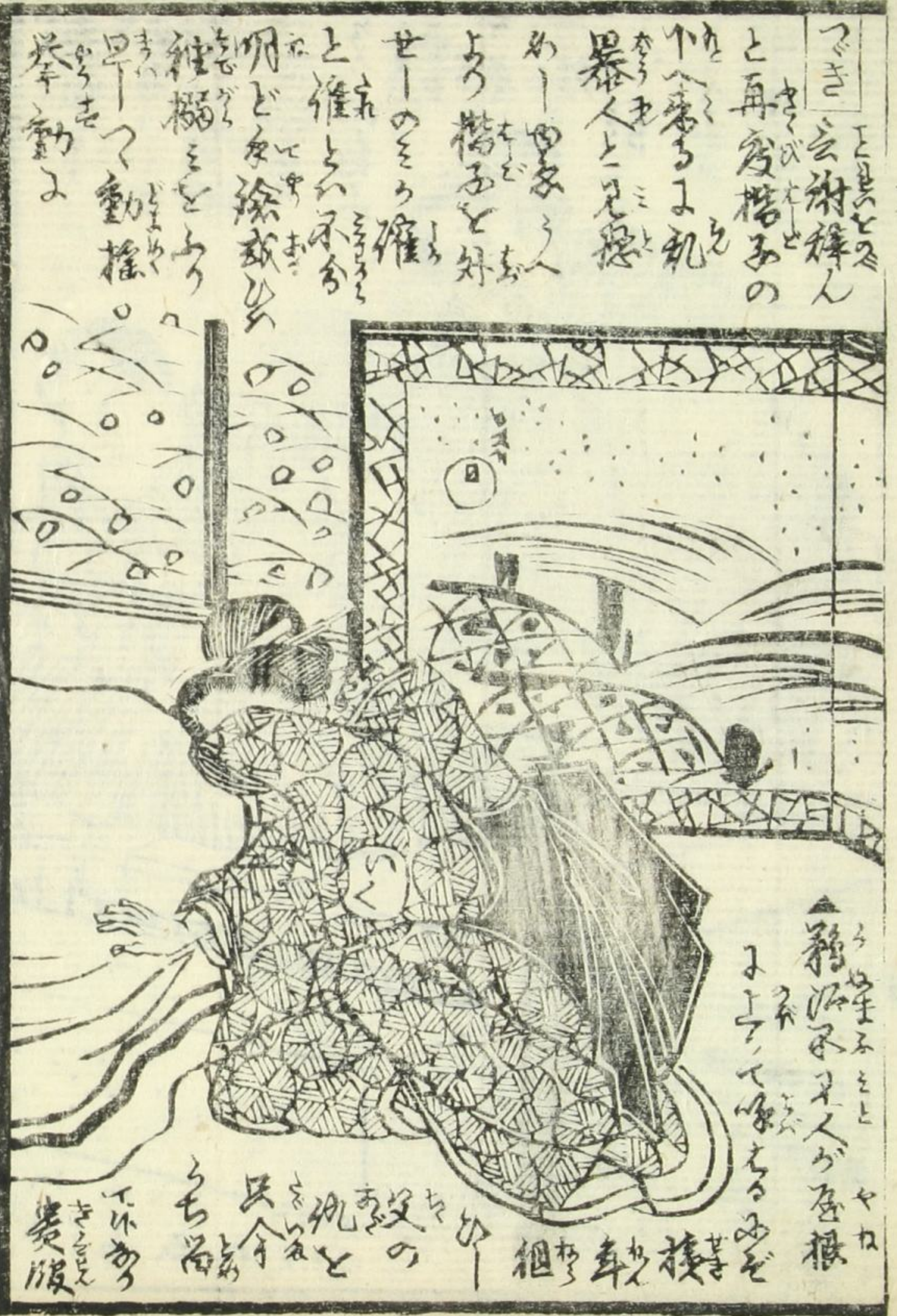


高由額と
 突を切放
 せし壺久
 氏ハ三十三
 と一松と
 一七教みく
 横死と遠
 佛者の
 後作の因業

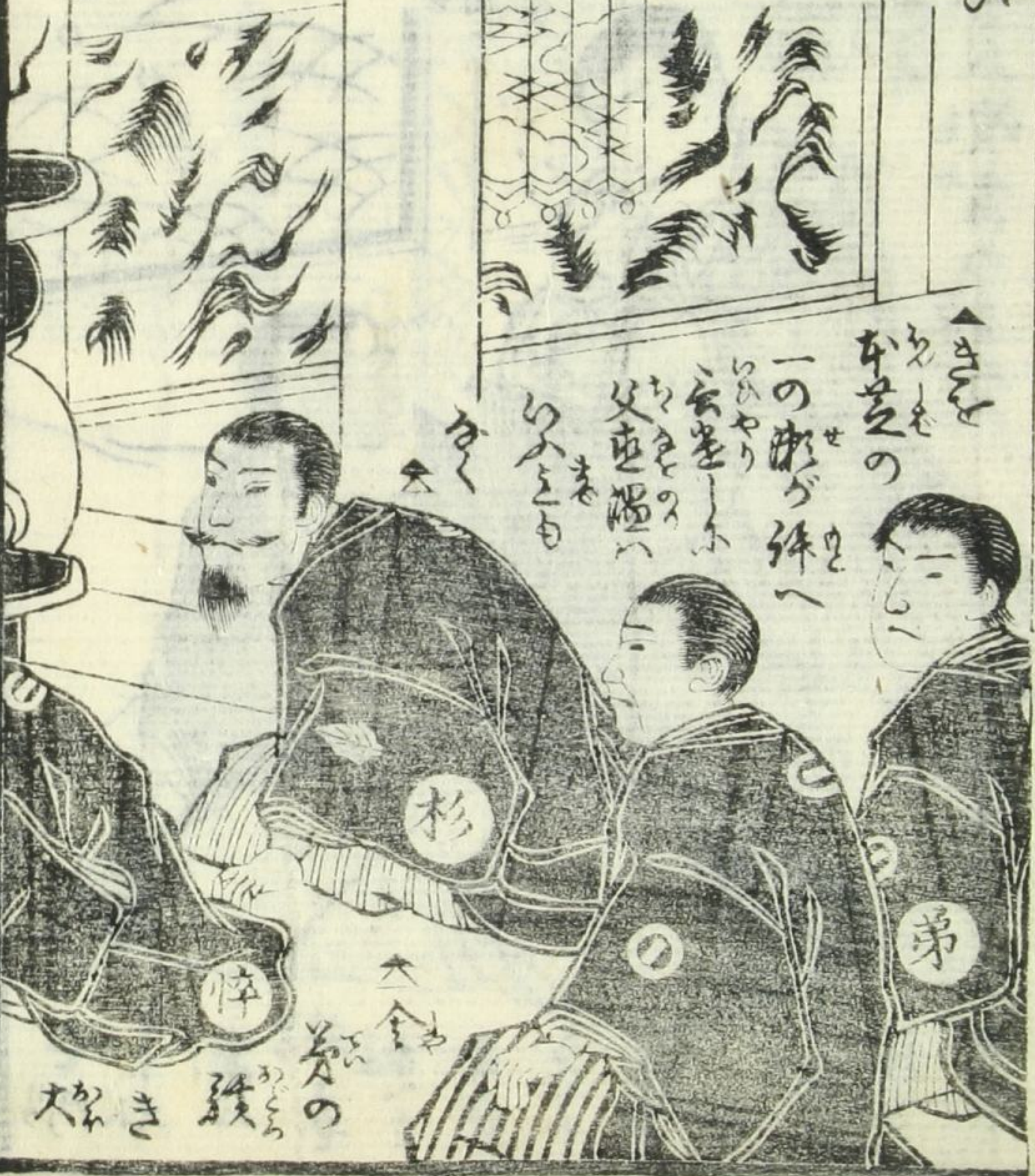
去抜ふくを道と頼よ
 網の徳然と立上
 深ま
 浄ま
 産後
 の作

冬三

三



つき車まよひ
腕車よ、おどろ
分二方面一分署
是二条所の登
系、西人自着せし
く、一急、多、調
の、久、後、郵、の、下
病、の、系、一、方、向
お、分、署、(系、指)
ま、且、二、と、尚、夜
二、条、所、の、系、お、お
より、系、指、の



大、き、強、の、

冬、系、指、若
後、送、と
冬、系、指、若
後、送、と
冬、系、指、若
後、送、と
冬、系、指、若
後、送、と
冬、系、指、若
後、送、と



方、々、
中、で、
つ、て



つぎおひき
 女はあつと
 ちうり残きを
 ぬくのふみ
 何れもあま
 唯茫然
 ちうり
 二拾祝儀
 りて重久氏
 の死骸ハ
 宅へ引ぬき
 一日死骸一



ちうり
 紅継り茶坊
 正作笑泣をうり
 さてゆるべき
 あらざれを羽
 十二月二十八日
 瑞上ち山内
 某院へ埋葬
 何れがあつ日
 杉本校
 別乗の整くも
 ちうり
 ちうり
 ちうり

海一が後朝廷
 累年を致知強の



尚部役を換
 末と洋細報知
 よ及びいふ
 祖父控置
 初と受より
 後き繰ぐ

東京裁判所
 送
 送
 送

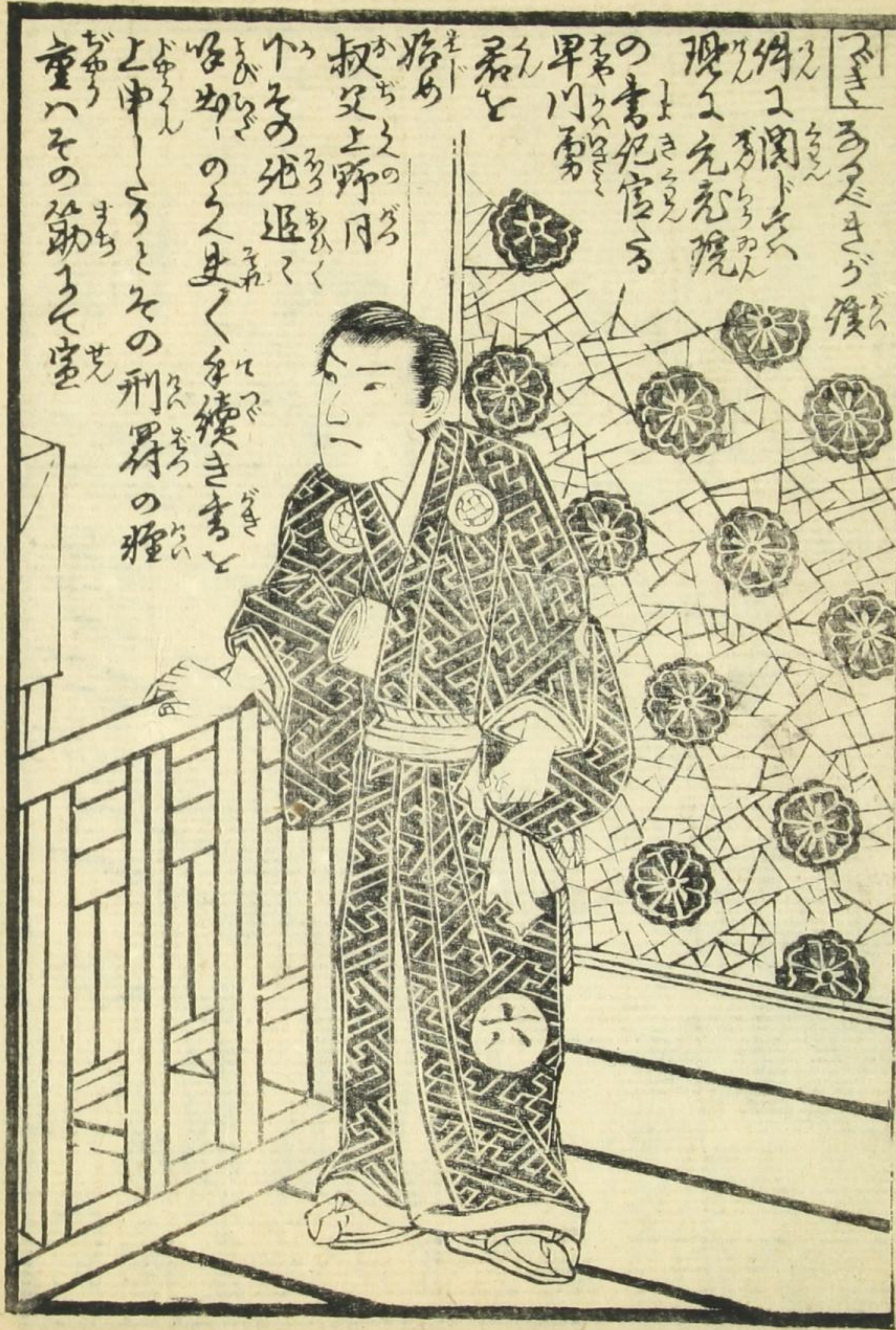
甘味
 幸之不用
 康刑工
 送



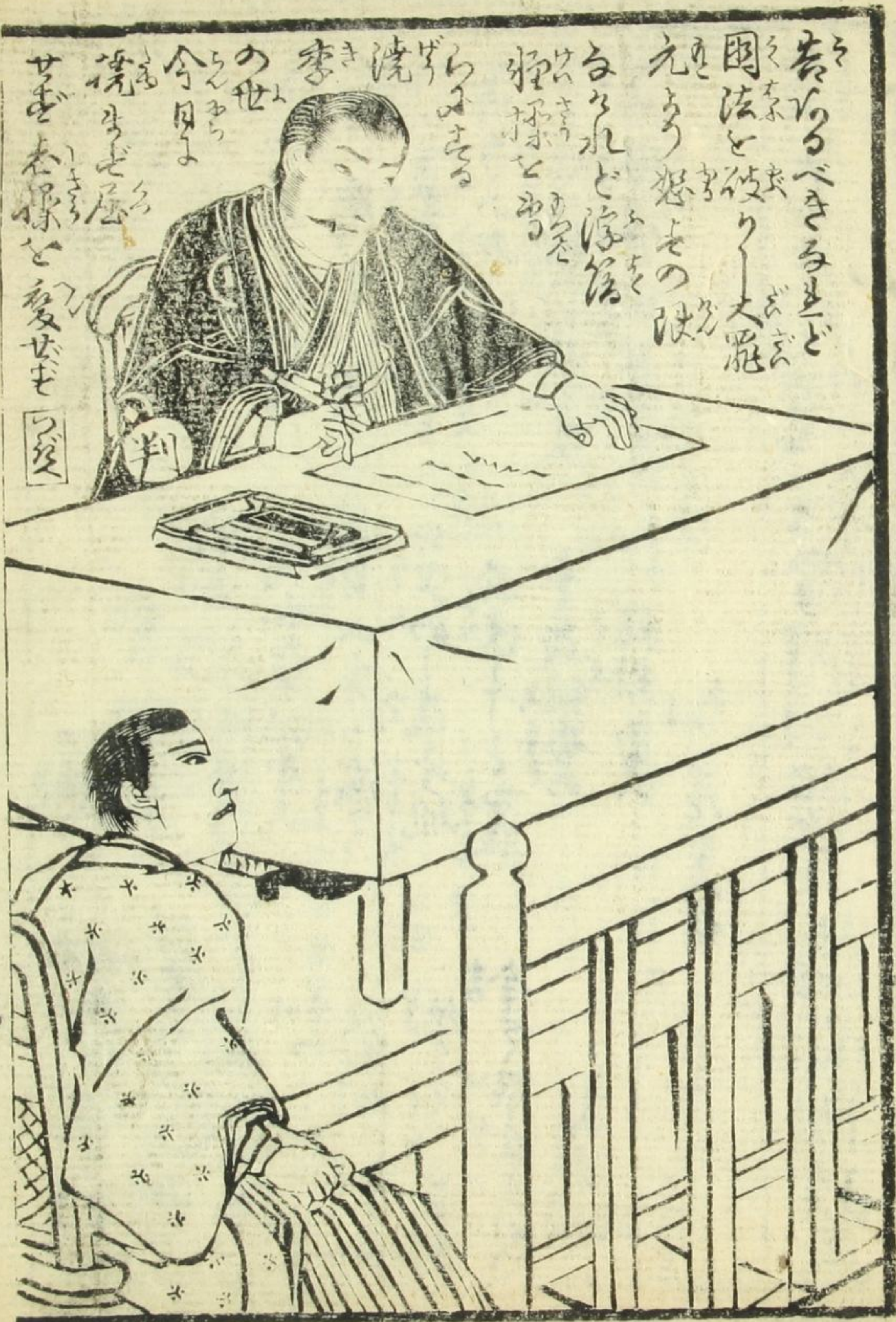
つき功より
 系資料全
 百円と揚り
 中の長性ある
 倉一儲け
 筑前秋月の
 白井慕が家
 西へ上野月
 六条が後
 難の格ふと
 電報よく報知

一人を制し
 去り和歌と
 慕俱侶直理
 買へ電任部

親子兄弟
 の情
 だも
 あり
 なんと
 慕せ
 らはぬ
 初て白
 升の身
 ハ壁



ふきあふまきぐ後
件二関ト云
現二元元院
の書死官方
早川勇
君と
始め
叔父上野月
下その死退く
吸切の之はくを續き書と
と申しうとその刑罰の種
童ハその筋を室



考らるべき事ほど
困法と破り大罷
元より怒その状
るこれと浮信
控探と書
らみさる
季
の世
今日よ
流まど屋
甘巻本探と愛せま

判

つき一巻通し亡父の
任まを教せし書名よ
於てい丈文の由とも
委ねらるる赤紙の
細糸の教つても治よ
綿をまき若むしを名と
その名も小巻楓月夕
糸と糸後拾へぬ投多し
安や織者の朝笑ひをえ

▲拙作
筆と巻く園
編者曰く本編よ
浅れたる記事の
不日去帝が上巻が
と空のし後を楓
吟送とくく女板
まはる結ぶの
務難ありの
おめたきみお

▲高の巻よる
巻初編の巻よ
おめが父の教を
一巻通し久氏と
知つてるハ何人の
巻の巻の助がお
巻りなくとせよ
全巻撰文をわい
その味は
と附を

猫々道人関彩霞園柳香著梅堂國政出

官 朝鮮
許 牛肉丸
名法
大包代二十五粒
小包代十二粒五厘

官 天泰丸
許
はんせきの薬
色代六粒三厘毛

此薬は男女老幼をば用ひては後以て
分一ひかりとすのふしやあやめあり
其の功業は用ひて後ゆるし并に
まことやうふくえきをまよまの薬と
われは虚弱の人をしてを病むは後
む薬後ハ後とありは求とありは
此天泰丸は長い方一人せんせん
そく。らうとあり。まやくはふん
。うあん。きやうあり。さんせん
さんどのせん。小児百日せんその他
一切のせん。用ひて功後速くあり
毒しくハか後とあり。

書肆
日本橋區横山町三丁目二番地
錦繪問屋 金松堂 辻岡丈助



Large stylized characters, likely the title or a significant part of the book's content, rendered in a traditional calligraphic style.

Handwritten text in black ink, arranged in vertical columns, likely providing additional information or a signature.